

戸東部新都心へ変わってもその豊かな伝統と業績は引き継がれ、新しい設備と機器を駆使し、海洋と気象そして地域の防災拠点として、また自然環境情報

研究センターとして、海からの新しい風をうけ洋々たる二十一世紀の未来へ船出されることを皆様とともに慶びたいと考えます。

学会事務局の移転に想う

齋藤 實

元海洋気象学会「海と空」編集担当理事，元神戸海洋気象台海洋課長

神戸海洋気象台が海岸近くの合同庁舎に移転することになり、学会事務局も変わるので、その記念号に寄稿して欲しいと、南 理事からの依頼があった。5年前に、「海と空」70巻記念に私の学会事務局活動の思い出を書いたばかりなので、なるべく違う視点で書くつもりであるが、重複する部分も生じるのはご容赦いただきたい。

海洋気象台を初めて訪れたのは1976年、元町駅から、地図を見ながらでも道を何度か間違え、喘ぎ喘ぎ坂を上った。第一印象は解りにくく、行き着くのにえらく疲れる山の上の気象台であった。4月には家族を伴い赴任したが、宿舎は山の西側の斜面にあり、下の公園に止めたトラックから急勾配の石段を職員の人達が荷物をかつぎ上げてくれたのが非常に印象に残っている。

初めての海洋の仕事も、神戸の生活も慣れるのに時間はそんなにかからない。宇治野山は街の中の小高い丘で、気象台3階の海洋課の部屋からの眺めは広々としており、建物は歴史を感じさせる落ち着きを持っていた。特に図書室は貴重なもの珍しいものを含め文献がそろっており、別棟の書庫には「海と空」など学会出版物のバックナンバーや古い本がうず高く積み、部屋の暗さ、かび臭さとともに研究の歴史の重さを感じたものである。その中で、入会したばかりの私は担当する編集理事の仕事を、大きな支障もなくむしろささやかな喜びを感じながら進めることができた。もちろん海洋課を中心にした気象台職員の心からの支援・協力があって実現した

ものである。家では夜寝ていると、大きなムカデがほとんど布団の上に落ちてきたり、子猫ほどもある鼠が走り回るのに驚かされたが、樹木があり、草原や灌木に覆われた宇治野山の自然のもたらしたものと納得がいった。職員もこの自然を大事にしていたし、気象台から俯瞰できる生田中学の生徒が時に授業を抜けて草の中に憩っていることもあった。

第60巻記念号に、当時の理事長 片山昭氏が海洋気象学会の歴史について優れた一文を寄せている。それによれば、この学会が海洋気象台職員の研究の場として発足したこと、海洋気象台職員の手によって運営されてきた経緯がよくわかる。時代とともに学会も発展し活動の形が変わってきたが、このことは根っこのところでは変わってない。気象台の職員は歴史を刻む建物に非常に愛着をもっていたし、海洋気象台の伝統と立地条件に大きな誇りを持っていた。そのプライドが、海洋気象学会を維持運営して行く原動力になっていたと私は思っている。学会事務局を置き、研究発表会やシンポジウムを開き、研究誌、啓蒙誌を出版する。こうした学会運営の仕事は、気象庁の一機関としてなすべき義務を超えたものがあるのだから。さらに付け加えるとすれば、海洋気象台の職員としての調査研究に対する情熱と努力がそれを可能にしてきたと言えよう。

私が神戸を離れてわずか9ヵ月後に生じた大震災は衝撃的だった。地震発生の約1ヵ月後に、神戸大学での講義に出かけたので、市内のあちこちで痛々しい地震の傷跡を眼にした。気象台も測風塔にひび

がはいり、頑丈そうに見えた建物も傾いていた。なかでも図書室の惨状を見た時、伝統の崩壊を感じ暗然とした。それから3年半、2つの庁舎に分かれ、多くの不自由や困難を克服されて本来の仕事も学会の運営も立派に遂行された気象台職員の方々に衷心からの敬意を払います。その意味では、今回新しい建物に移ることを心から祝いたい。

新しい庁舎に移ることについて、いろいろな反対があったことを聞いている。気象観測の継続性一つとってもそれは理解できる。学会活動などを支えるプライドの源泉でもあったであろうから。しかし、仕事を囲む環境は時間とともに急激に変わる。私にとっても神戸を去って5年の間に、大震災があり、海洋気象学会を親身に支えてきた半澤前会長も、「海と空」に関する歴史を行き届いた眼で調べ残し

てくれた片山元理事長もともに今はない。編集理事の南さんは私がおその担当だった時、若手として私を支えてくれた人である。

新しい環境にはそれなりの良さもある。全職員が一箇所で、便利で快適な建物で仕事ができる。海の近くで訪ねやすく(たどり着くのに息を切らさなくてすむ)、関係機関がそばにありいつも世の中で仕事をする環境である。孤高の山の気象台からの変化に、若いとき愛読した「ツアラツストラは山を降りる」くだりを連想する。気象台の学会から対象を全国の海洋気象研究者へと大きく広げてきた海洋気象学会の事務局として、よりふさわしい立地条件であろう。連綿として続けてきた事務局の仕事も気象台に限らず広い範囲で考えて行くべき時期かも知れない。

江口 邦

世帯

はじめて「海と空」をおとずれる

北村 弘行

海洋気象学会理事、「海と空」編集委員、総合科学(株)

1. 転倒温度計

1947年5月15日に神戸海洋気象台長松平康男先生から「海洋課化学生物掛勤務を命ずる」の辞令を受けとり、海洋課の化学室に配属になった。辞令書は北太平洋天気図の裏面を利用した、謄写刷りであったのを覚えている。

当時の海洋課は課長斎藤行正さんのもと、渡辺貫太郎さん、市栄 誉さん、吉沢 博さん、大西 郷さん、吉岡平太郎さん、田中康治さんらがおられた。化学室には吉岡さん(プランクトン)と田中さん(化学)が先輩としておられ、そこへ新入生として仲間入りした。化学室は一階にあり、海洋課の執務室は3階にあったからこのときから気象台を去るまで一階と3階を往復することになる。

海洋課に移ってまず海洋測器を教えてもらう。そのときにお目にかかったのが第二次世界大戦をかくぐって生き残ったドイツ製の転倒採水器と転倒温度計であった。学生時代に聞いていたが実物に触れるのは始めてであった。

化学室には、デンマーク国立海洋研究所で作製したアンプル入りの標準海水が5本一組で木箱に入ったのが格納してあった。また、岡田武松先生が欧州から持ち帰ってこられたというメテオール号が使用した緑色の採水瓶が運搬用取っ手のついた頑丈な箱に入っていた。分析試薬は殆どがメルク社製であった。クヌーツセンの塩分検定用のビューレットはデンマーク製で、読取値が千分位まで直読できた。

2. 函館海洋気象台

北海道東方と三陸東方海域の海洋調査を、函館海洋気象台が函館水産専門学校の練習船“おしよろ丸”で行うことになった。観測に使用する温度計の比較検定を当時中央気象台の海洋課におられた渡辺信雄さんの指導下で相模灘ですることになり、神戸にあるドイツ製の防圧、被圧両転倒温度計を準器とするために函館海洋気象台から津幡さんが借りてこられた。

台長から転倒温度計の管理かたがた海洋観測実習を兼ねた出張を命ぜられて、一週間の予定で横浜の三菱造船所に繋留している“おしよろ丸”へむかった。ところがドックでの作業に手違いがあったのか、出航が遅れさせて相模灘へ到着しても台風の余波か波浪が高くてとても検定作業を行うような海面状態ではなかった。2日間の予定のはずが10日も日程を消費するようになった。とにかく検定作業が終わったので、出張予定期間も過ぎているので早く神戸へ帰らねばと、函館から神戸経由でおしよろ丸に乗船されていた津幡さんに話を出した。

どこでどのように話が進んだのか、ついでに“おしよろ丸”に乗って函館までゆき、計画の海洋観測を経験したらどうだ。ということになった。

3. 北海道・東北東方沖の海洋観測

神戸を出発するときは半袖カッターシャツであったのに、観測の途次釧路へ寄港した時、日付けは11月3日になっていた。乗船していた台長の竹内能忠さん、津幡文隆さん、秦克巳さん、渡辺博之さんたちと農耕用の馬車に乗って弟子屈温泉から摩周湖へといったのがついこのまえのように思われる。

釧路を出港してからは、海上は冬の様相を深くし高波と吹雪き混じりのなか、巻上げてきた採水器が凍り付いてはめている軍手が採水器にくっつくしまつ。昼夜を分かつたずトロールウインチの馬力は大きいものの回転速度がノンビリ、作業の間デッキでは寒さに振るえあがった。全点での溶存酸素の分析を担当して無事函館に帰港した。函館は雪の中、冬の

衣類一切を借りてやっと帰神した。

4. 「海と空」

海洋気象学会の前身は「時習会」で、大正9年8月に海洋気象台発足と時を同じくしている。学会と海洋気象台は別の組織であることは言うまでもないが、学会事務局が海洋気象台構内であって付かず離れずの関係にあった。

課長の斎藤行正さんは当時海洋気象学会の編集を担当されていた。昭和22年も暮れようとする頃私に北海道・東北東方海域の観測結果を使って報文を投稿するようにすすめられた。担当した溶存酸素のデータから少しでも成果がまとめられたらと、斎藤さんの指導で作業に取り掛かった。

題名、本文の論旨、記載する図・表の決定と製図などなど一から十まで教わりながらの作業で、何回となく原稿が往復した。斎藤さんにとってはなまじっか声をかけたために大変な迷惑なことであつたらうといまも恐縮している。掲載がOKとなり印刷にまわつたが、次は印刷原稿の校正が待っている。初校、2校、3校と校正刷りを行う段階で校正の大切さを教えられた。こうしてはじめて海洋気象学会誌に掲載された報文が「海と空」第26巻、第2号(1948)『溶存酸素量より見たる昭和22年秋季におけるおける東北海区の中層水について』となった。

斎藤さんからはその後も学会誌に掲載することの重要性、それに伴う的確な表現と説得できる内容。印刷原稿にたいする校正作業の難しさと、著者への配慮などなどを折にふれ教わってきた。当人の不勉強でその後海洋気象学会への投稿はとぎれ申し訳ないことになった。斎藤さんから教わつたこれらの事柄は今でも貴重な教訓として心の中にいきている。

5. 更地の風景

阪神・淡路大震災の後、20年の間世話になった部屋が影もかたちもないとの噂を耳にした。この目で確かめたいと暫くして宇治野山を訪れた。

海洋気象台に入って初めて仕事をした海上気象課

の別室、かって松平さんが陣取っていた台長室、図書室、関東大震災発生後気象無線取り扱い規則に違反してまで発信したとされる無線室、大正時代を彷彿とさせるステンドグラスの窓があったラセン階段。私が海洋課に配属になって以来研鑽の機会を得てきた化学実験室など建物も消えてしまっている。更地になったところを見てあまりの狭さに浮かぶことばもなかった。

6. 新しい防災情報の発信基地に期待

震災後、海洋気象学会会長であった半沢正男さんは、新しい海洋気象台の再建について機関誌「海の気象」

Vol.41, No.2のなかで“被災後、神戸海洋気象台の今後の課題”を訴えておられた。しかし分散して気象業務の遂行を余儀なくしていた状況も、海岸通りに新庁舎が完成して1999年8月には移転されると聞く。

震災後の神戸新都市再開発の構成機関として、新しい器の気象防災に対する先端的な情報発信基地として活躍を期待する。

海洋気象学会も新しいオフィスで業務を始められることであらう。

ここに私と「海と空」との関わり始めを駄文に託し、学会関係者の皆さんに心からお祝いとお礼を申しあげます。

「海と空」第75巻の発行にあたって

西山勝暢

海洋気象学会理事，気象庁海上気象課長

1921年に「海と空」が発刊されて80年が過ぎようとしている。この歴史ある海洋気象学会の長寿はまことに慶ばしいことである。さて、「海と空」第60巻第1号(1984年10月発行)の特別寄稿で当時の海洋気象学会理事長片山昭氏は「『海と空』の側面史」を書いておられる。その内容は第1巻から59巻までの「海と空」の各巻の総頁数から、第1巻から10巻まで(1921～1930年)を「創成期」、第11巻から24巻まで(1931～1944年)を「高度安定期」、第25巻から40巻まで(1945～1965年)を「混乱・苦難期」、第41巻以降(1966年～)を「再建安定期」と分けられ、各期間の当学会の歴史を述べられている。私は第60巻以降について述べてみたい。

私は1962年に神戸海洋気象台海洋課に赴任した時に当学会に入会し、神戸に3年間勤務したが、前述の「混乱・苦難期」の終わりの時期に当る。当時の平沢建造理事(当時神戸海洋気象台予報課長)を始め、

関係者の奔走により、当学会は海運振興会より補助金がいただけるようになり、1965年の「再建安定期」に入るとともに私は神戸海洋気象台を転出した。1987年に神戸海洋気象台海洋課長として再び4年間神戸に勤務することになり、この間「海と空」の担当理事として当学会をお手伝いした。1991年に神戸を転出したが1999年の役員改選で関東・中部地区理事となった。

さて、第4図には片山氏の示したものに、第60巻から74巻まで(1984～1999年)の各巻の総頁数を加筆したものである。今亡き片山氏はこの期間を何と呼ばれられるであろうか? 「乱立変動期」とでも言うていいだろうか? 今私が国内で所属している学術学会は当学会のほか日本気象学会、日本海洋学会、日本雪氷学会、水産海洋学会、海洋調査技術学会がある。その外日仏海洋学会・日本水産学会もあり、月刊「海洋」も発行されている。これらはかなり古